



### 法事

法事とはどういうものなのでしょう。亡き人をしのぶ心遣い、人間的・宗教的な心の動きはありません。

一体、人間とは一人では生きて在(あり)えない存在なのです。意識する、しないにかかわらず、いろんな方々のおかげによって、はじめて生きてゆけるのです。人から愛され、また人を愛してこそ、人と人との関係が成り立ち、自分をふくめての人の社会が成り立っているわけです。これが仏教でいうところの「縁(えにし)」というものです。

だから愛する人や、身近な人を失うほど人間にとって深刻な打撃はありません。「いつまでも、あなたと共に在れかし」の願いがくじかれてしまふのですから、嘆きは何にもまして深刻です。

しかし、そのときにその人は仏さまの世界にいきていくのだと受けとめることが信仰となります。亡き人をしのぶというのが、仏さまの大きな愛・慈悲の世界に往った人を、いまいるかのように思い、永遠の(真実の)幸福を願うことです。それが亡き人の冥福を祈ることであり、追善供養も、その願いから行われます。

法事ということも、仏教を弘め盛んにするための行事を意味するとともに、亡き人の命日に追善供養、追弔法要を営むことをいうようになりました。だから法事は、仏法実践の一つの道です。亡き人をご縁として真実の教えである仏教に出遇う得がたい機会―それが法事だといえるでしょう。

### 覚えておきたい

#### 語源・由来

##### おかげさま

おかげさまは、他人から受ける利益や恩恵を意味する「お陰(おかげ)」に、「様(さま)」をつけて丁寧にした言葉である。

古くから「陰」は、神仏などの偉大なものの陰で、その庇護(ひご)を受ける意味として使われている。

これは、「御影(みかげ)」が「神霊」や「みたま」「死んだ人の姿や肖像」を意味することにも通じる。

接頭語に「お」がついて、「おかげ」となったのは室町時代末頃からで、悪い影響をこうむった時にも「おかげさまが使われるようになったのは、江戸時代からである。

##### 挨拶

挨拶は、禅宗で問答を交わして相手の悟りの深淺を試みることを「一挨拶(いちあいいつさつ)」と言い、ここから一般に問答や返答のことを、手紙の往復などを挨拶と言うようになった。

「挨拶」も本来は「押す」という意味で、「複数で押し合う」意味を表す語であった。



##### ありがとう

ありがとうの語源は、形容詞「有り難し(ありがたし)」の連用形「有り難く(ありがたく)」がウ音便化し、ありがとうとなった。

「有り難し(ありがたし)」は、「有る(ある)こと」が「難い(かたい)」という意味で、本来は「滅多にない」や「珍しくて貴重だ」という意味を表した。

中世になり、仏の慈悲など、貴重で得難いものを自分は得ているというところから、宗教的な感謝の気持ちというようになり、近世以降、感謝の意味として一般にも広がった。



##### 「ご馳走・ごちそうさま

「ご馳走の「馳走」は、本来、走り回ることを意味していた。

そこから、客の食事を用意するために走り回る意味となり、さらに走り回って用意することから、もてなしの意味が含まれるようになった。

感謝の意味で「御(ご)」と

「様(さま)」が付いた

「御馳走様(ごちそうさま)」は、江戸時代後半から、食後の挨拶語として使われるようになった。



##### おはよう

おはようの語源は、「お早く〇〇です」などの「お早く(おはやく)」である。

この「お早く」が転じて、おはようとなった。

##### こんにちは

こんにちはの語源は、「今日は御機嫌いかがですか?」などの「今日は」。「今日は」以下を略すようになり、「こんにちは」となった。

##### 御の字

御の字の「御」は、尊敬の意を表したり、名詞の頭に付けて丁寧にするときに用いる。

その「御」の字を付けたくなるほどありがたいう意味で、「御の字」という言葉が生まれた。

もとは遊里から出た言葉で、江戸時代初期から見られる。



##### 季の詩

「できること」

顔を上げれば  
数多くの人がいる  
手を伸ばせば  
数多くの交流がある

交流の糸を通して  
数多くの人に  
幸せを与えられる

自分にもできること  
自分にはできること  
自分だからできること  
自分だけができること  
今日 会う人たちに  
してみよう

それをするために  
今 私 は ここにいる

産経新聞「朝の詩」より

